



エコクリティシズム研究学会

NEWSLETTER No. 6 May 1, 2022

<http://www.ses-japan.org/>

— 目 次 —

巻頭言「波の先にあるもの」	1
エッセイ	
「コスタリカの風」	2
「文学のことば」	3
「失われたか、魅惑のブラジル原風景」	4
会員の新刊紹介	5
News & Information	6
編集後記	8

巻 頭 言

波の先にあるもの

塩田 弘 (SES-J 会長)

ますます混迷を極める世界状況の中、不安な波が怒濤のように押し寄せ、多くの人々が無力感に襲われています。これまで全く想像もしえなかった出来事が世界で起こっており、むごたらしい風景や、苦痛に満ちた人々の姿がテレビ画面を通じて津波のように襲ってきます。一方、第一波からはじまった新型コロナウイルス感染症は、第二波、第三派、第四派、第五波、第六派と、私たちはいくつもの波を超えてきました。

ふと本棚に目を向けると、本学会の会員の皆様の共著『エコクリティシズムの波を超えて——人新世の地球を生きる』（音羽書房鶴見書店、2017年）があり、その予言的な意味合いをもつ本書のタイトルについて、松永京子氏は以下のように説明していました。

「エコクリティシズムの波を超えて」というフレーズは、波の先に「エコクリティシズムではない何か」があることも示唆しており、エコクリティシズムの可能性を示そうとする本書の試みとは矛盾していると思われる方もいるかもしれない。しかし、エコクリティシズムという一つの文学批評の形態が、科学と文学の境界、人間と環境の境界、種の境界、場所の境界、時間の境界さえも越えながら、幾つもの「波」を生み出してきたと考えるならば、波を超えるという行為は必ずしも終わりを意味するものではないだろう。あるいは、エコクリティシズムの「波」は、他の幾多もの「波」の打ち寄せる海へと広がることで、これまで思いもよらなかった新たな未来の地球を想像する力を与えてくれるのかもしれない。いずれにせよ、エコクリティシズ

ム未来も、地球未来も、いまだ不透明なままである。本書が、これを手を取った読者と何らかの形でつながり、エコリティシズム未来や地球未来を考える新たな「波」を起こしたとすれば、これ以上悦ばしいことはない。(松永京子「はじめに」xxi)

打ち寄せる波に飲み込まれるのではなく、苦しい時代の先に「新たな波」を起こすこと。現在のよう不安と混沌の時代こそ、自然の声に耳を傾け、その美しさに触れること。歴史に学びながら、一人一人が、それぞれ新たなストーリーを紡ぎ、この危機に立ち向かう静かな、粘り強い波を起こしていくこと。そうできることを私は祈っています。

エッセイ

コスタリカの風

黒住 奏 (国連平和大学院生)

私は今、コスタリカに住んでいる。軍隊を持たずに平和国家を築いてきたこの国で平和教育を学ぶため、八月の終わりに家族と共にここにやってきた。私が住んでいる町コロンは、緑深い山の麓のこじんまりとした閑静な所だ。初めて歩く土地なのに、生まれるよりも遠く昔に暮らしていたような気がする、そんな懐かしい温もりがあり、人間の営みの根源のようなものが、そこに漂っている。暮らし始めた時期は雨季の真っ只中で、毎日雨が降っていた。真っ青だった空が、突然ピカピカと光り、大気がバリバリと裂かれ、地がゴロゴロと唸る。風が走り抜け、雨煙が立ち昇る。家の前にどっしりと聳え立つ木が、大きなオレンジの花をぼたりぼたりと落とす。この雨に、緊張や興奮や不安を全てゆだねるようにして、私の二度目の大学院生生活が始まった。

山の斜面に広がるコーヒー畑を眺めながらガタガタの山道を登って行った先に、私の通う国連平和大学がある。朝の空気と山の香りを纏った風がキャンパスを通り抜け、教室の窓からは、花の蜜を吸うハチドリ、たおやかに枝葉を揺らす背の高い椰子の木、雄大な山々、そして無限に広がる蒼い空が見える。授業中にニワトリが入ってきたり、猿が屋根の上を走ったり、犬が足元に寝っ転がっていたりもする。この楽園のような場所で、世界中から集まってきたピースビルダーたちと共に学び合っている。私が専攻する平和教育のプログラムでは、今まで経験したことのない「学び」を体感している。仲間と共に学びの空間を創り、互いのヒューマニティを分かち合うプロセスで、魂が剥き出しになり、そこに色々なモノが流れ込んできて、それらが腑にどっしりと落ちていく。この学びの体験を通して、私が今まで、広島、ニューヨーク、そしてアメリカ南西部から受けとった物語たちが、コスタリカの木や風や鳥から受けとった物語と混ざり合い、新たな物語へと進化し、違う音色を奏で始めたように思う。こんな風に、これまで自分が歩いてきた道を振り返り、自分という人間に向き合い、ワクワクしたりモヤモヤしたりを繰り返しながら、これから歩いていく道を、一つずつ少しずつ創る作業を日々繰り返している。

大学院だけでなく、日常の暮らしの中でも多くのことを肌で感じている。カラフルな花が咲き乱れ、鳥の声が何重にも響きわたる、大きな木々に見守られた町。そこでものんびりと暮らす人々。この町の暮らしは、物やお金では測れない「豊かさ」で溢れている。コスタリカで暮らしていると、Pura Vidaという言葉をよく耳にする。日本語にするとしたら、「純粋な生活」、「素朴な人生」と訳せるだろうが、私は、このPura Vidaには「真の自分を生きること」という意も含まれていると思う。真の自分を抑圧することなく、何気ない当たり前の毎日を、純粋に、素朴に、そして自分らしく生きること、真の豊かさがあるということ、この町に暮らす人々は知っているのだろう。

コスタリカの時間の流れはとてものんびりとしているのに、あっという間に時は経ち、いつの間にか、知らない道はいつもの道になり、知らない景色は愛おしい景色になり、新しい生活が普通の日常になっていく。それは至って当たり前のことなのだけれども、みんなそうやって毎日を生きていて、それがこの世界を作っているのだと思うと、なんだか胸がいっぱいになる。その当たり前の毎日を送れることの尊さを抱き締めたくなる。コスタリカに暮らし始めて、半年。長い

雨が止み、風の季節がやってきた。大きな太陽の光の中に浮かび上がる町を、強い風が颯爽と吹き抜ける。家の前の木は、いつの間にかオレンジの花を落とし、たわわに実った不思議な形の実を揺らしている。鳥たちも違う音色の歌を歌っている。コスタリカの一日一日を生きながら、平和とは何か、真の自分とは何かを、問い続け感じ続ける。そうやって私は今日も、コスタリカの風に吹かれながら、広島から続く道を歩いている。

文学のことば

谷岡知美（広島工業大学）

文学は人の心を動かす。私たちは、詩・小説・戯曲を読んだとき、強く共感し、あるいは反発し、感激し、悲哀を感じ、時には怒りを覚えたりする。文学には人を引き付ける力がある。では、そのような力のある文学、文学に使われている「ことば」とはいったい何なのだろうか。特に詩のことばははっきりとしない。例えば、ホイットマンの言う「自由の鷲」(the eagle of liberty)とは何を示すのか。また、ギンズバーグは「カリフォルニアのスーパーマーケット」(“A Supermarket in California,” 1955)で実際にホイットマンに出会ってはいないだろう。

イギリスの哲学者である J. L. オースティン (J. L. Austin, 1911-60) は、「日常言語学派」(ordinary language philosophy) の代表的な人物であり、「発話行為論」(speech-act theory) を編み出した。彼のハーバード大学での講義録、『言語と行為』(*How to Do Things with Words*, 1962)において、彼は、私たちの「発言」は、そのすべてが何らかの事実を記述しているのではない、ということを描き、「何かを言うことは同時に、何かを行なっていること」だ、とか、「私たちは何かを言うことで、何らかの行為を行っている」という主張をする。これが、「発話行為」(speech-act) である。彼が早逝したため、この理論は不完全なまま残されており、その解釈は多岐にわたり非常に難解である。特に、文学においては、断片的な示唆のみが残されている。

そのため現在では、哲学、法学、言語学、社会学やジェンダー論等の分野において、学者や評論家が「発話行為論」をさまざまな独自の視点において解釈し、問題を解明するためにそれを応用している。有名どころでは、キャサリン・マッキノン (Catharine MacKinnon) やジュディス・バトラー (Judith P. Butler)、最近では、メアリー・ケイト・マクガワン (Mary Kate McGowan) が、どうして性差別やジェンダー差別が起こるのか、という原因究明のために、この「発話行為論」のフレームを用いて解決を試みている。例えば私たちは「女性は男性の下に属す」とはっきり言ったり耳にしたりすることはないが、しかし、私たちの日々のちょっとした意識のない発言の積み重なりによって、そこで「差別」という「規範」を私たちの発言が形成し、それが「コンベンション」(慣習) となって私たちの社会に定着してしまい、差別が起こっている。と同時に、この「コンベンション」が成立しているからこそ、私たちの発言が「差別」の「規範」になりうる、というのがざっとした内容だ。つまり、私たちの発話が「差別」という「行為」を引き起こしていると解釈できるのである。

このように、オースティンから始まる「発話行為論」は、「ことば」でできている私たちの世界のメカニズムの解明に、強く寄与している。私たちの「発話行為」の解明は、私たちの「行為」の解明にもつながるのである。文学の「ことば」はなぜ私たちの心を動かすのか。さらには人を動かし、ムーブメントまでも引き起こすのか。「発話行為論」を用いて考えると、文学の「ことば」とは、文学とは何か、加えて、詩・小説・戯曲という創作の違いは何なのか、という問いの解明に近づくことができるかもしれない。

失われたか、魅惑のブラジル原風景

毛利律子

この国は発見当初から 20 世紀初頭まで、続々と欧米諸国からイエズス会宣教師、動植物学者、地政学者、画家、博物学者そして探検者の波が押し寄せ、国の姿が鮮やかに、詳細に記録され遺された。中でも、博物学者として英海軍の測量艦ビーグル号の 2 回目の測量航海（1831-1836）に乗船した若きチャールズ・ダーウィンは、彼が目にした南米大陸の印象を「ビーグル号航海記」で瑞々しく鮮やかに綴った。

そして 1865 年から 1868 年の 3 年間、サントス領事としてブラジルに滞在し、19 世紀の最も魅力的な人物の一人として名を遺しているリチャード・フランシス・バートン卿がいる。ブラジル奥地にサンフランシスコ川という、南米およびブラジル全体で 4 番目（アマゾン、パラナ、マデイラに次ぐ）に長い川がある。内陸部のミナス・ジェライス州を源流として 5 州に跨がり、大西洋に至る全長 3,160km の大河である。バートン卿は 1867 年 6 月から 11 月まで約 5 カ月間の未踏の地探検に出た。47 歳のときであった。その行程を記録したのが『ブラジルの高地』（Explorations of the Highlands of the Brasil）である。人類学者でもあったバートン卿の徹底した事前調査と、大英帝国優越意識での政府向けの現地調査報告などは、非常に興味深い。実際に目撃した川沿いの村や人々の生活習慣は、バートン卿の好奇心を掻き立てた。詩人でもあった彼の情景描写は、当時の風景を映像のように描いている。

来訪者たちの膨大な記録、風景画から、ブラジルの原風景がどれほど強く異邦人たちの心を虜にしたことか。数百年前の人々が未知の世界に触れた時の感銘の鼓動が聞こえてくるようである。しかし今、これは大昔のブラジルの遺影となった。

ヨーロッパ人が上陸した大西洋岸には「緑の回廊」マッタ・アトランチカ（大西洋岸森林）が崖のように林立していた。そこはアマゾンと並ぶ世界有数の森林地帯で、ブラジル、パラグアイ東部、アルゼンチン東岸をカバーする熱帯雨林生物群系に属する。その森は 1500 年以降、ポルトガル人の植民地化を契機に徐々に失われ始め、現在ではもとの 7%弱しか残っていないという。かつてその森には、国名となったパウ・ブラジルの高木が聳えていたが、激しい伐採によって今では絶滅危惧種として登録されている。ヨーロッパ人が初めて出逢った異文化への畏敬の念はたちまち貪婪な欲望に変わり、原生林を根絶やしにしたのである。

2019 年 8 月下旬、アマゾンの熱帯雨林に発生した火災での黒煙が 2,700km も離れたサンパウロの空を不気味なほど薄暗くした。ちょうどフランスで G7 サミットが開催されていた。マクロン大統領は「皆さん、私たちの家が燃えている、地球の肺が燃えている。これは国際的危機だ！」とツイッターで呼び掛けた。だが、当事国のボルソナロ大統領は、「ブラジルの参加しない G7 で森林火災問題を取り上げるのは見当違いの植民地主義的思考だ」と対抗した。

もし、この地球上でアマゾン熱帯雨林が消えたらどうなるか。世界自然保護基金（WWF）の広報によると、世界の 17-20%の水資源、10%に及ぶ生物多様性、670 万平方キロの熱帯雨林、3,400 万人の生活が失われることになる。即ち、この熱帯雨林が二酸化炭素を吸収することで、温暖化の進行抑制に欠かせない役割を担っている。ブラジル国立宇宙研究所（INPE）の人工衛星での観測によると、2019 年だけでも約 7 万 5,000 件以上の火災が発生したと報道している。

一方、ボルソナロ大統領は、「熱帯雨林の大半を保護するために必要な『現代的法則』は十分整っている。あの地域には 2 千万人以上のブラジル人が住み、その人たちに経済発展の機会を与えなくてはならない。自然保護だけすればよいというものではない。伝統的に今は乾燥期だ。特に暑い夏は山火事が増えるのだ」と自然要因を強調した。ところが欧州連合（EU）からの圧力を受けてすぐに「軍人としてアマゾンの森林を愛することを学んだ。そのために、保護に協力したい」と、火災鎮圧のために軍を派遣することをテレビで演説した。

「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」とは栃木県佐野市出身田中正造（1841-1913）の言葉であるが、今、アマゾン流域で起きている状況を知るにつけ、この言葉を思い出している。

会員の最新刊紹介

メンバーリストで紹介された会員の単著です。



『ソロー流究極のシンプルライフ』

毛利律子／著（文芸社）
発売日 2021年7月1日
四六判 184ページ
定価 1,300円＋税

COVID-19は「自立した孤独生活を営むこと、自分なりの健康管理法を実行すること、歩き回ること、食べ物をゼロから用意して調理することの必要、身の回りを見直す価値を再発見している」と作者は語る。『ウォールデン』や『日記』の中の言葉に解説をつけながら、森の中に小屋を建て、孤

独で簡素な生活を実験したソロー流シンプルライフの極意を明らかにした本書は、コロナ禍に生きる我々に多くの示唆を与えてくれる。あとがきで作者の長年にわたるソロー研究には、司馬遼太郎氏からの励ましがあったことも明らかにされている。



『抵抗と日系文学——日系収容と日本の敗北をめぐって』

牧野理英／著（三修社）
発売日 2022年1月30日
四六判 312ページ
定価 3,960円＋税

第二次世界大戦の日系収容と日本の敗北をテーマに、独自のナラティブを創造しようとした作家の「抵抗」を、日系作家の作品から読み解く。ヒサエ・ヤマモト、ワカコ・ヤマウチ、カレン・テイ・ヤマシタ、カズオ・イシグロ、ジュリエット・コーノを中心的に論議する。親の世代の迫害の記

憶から距離をもち、時に国境を越え、人種やエスニシティの主体的位置を越えた視線を提供する本書で取り上げる作家群が、第二次世界大戦における日系収容という捕囚体験、そしてその後の日本の敗戦という集団的記憶からどのような日系性を見出しているのかという問題を、作家とそのテーマとの距離感から探究する。(https://www.sanshusha.co.jp/np/isbn/9784384059953/より)



『「男らしさ」のイデオロギーへの挑戦——ジェンダーの視点からメルヴィルを読む』

高橋 愛／著（晃洋書房）
発売日 2022年1月30日
A5判 196ページ
定価 3,300円＋税

メルヴィルの6つの長・短編作品『タイプー』、『ホワイトジャケット』、『白鯨』、『ピエール』、『ベニト・セレノ』、『水夫ビリー・バッド』を取りあげ、登場人物たちの「男らしさ」を問う。男らしさの諸相を描き続けながら、

男らしさを覇権的な理念に固定させまいとしたメルヴィルには、オルタナティブなものが存立する可能性に目を向けようとすることなく、特定の規範を押し付けてくる社会への抵抗があらわれているという。

News & Information

◆◆◆◆ 大会報告 ◆◆◆◆

ワークショップ報告

2021年8月14日(土) 10時00分～17時10分

Zoomによるオンライン開催

真野 剛 (海上保安大学校)

2020年はワークショップのみオンラインで開催し、年次大会は延期となった。今大会でも開場を利用しての通常開催は断念せざるをえなかったのだが、コロナウィルスの長引く影響を感じつつも、オンラインでとはいえ、終日での年次大会が開催できたことは会長をはじめとする方々のご尽力によるものであろう。

さて、2021年の年次大会は別府大学の三重野佳子氏による司会進行のもと、塩田会長の挨拶で幕を開けた。まずは菅井大地氏を中心に浅井千晶氏、伊藤詔子氏によるワークショップ「*Blue Humanities—Wild Blue Media* (2020)」が行われた。ダイバーとしての経験を持つ Melody Jue による同書は、海をメディア環境として捉え、メディア理論の中心を海の中へと移すことで認識の再構築を試みたものである。研究発表としては、林千恵子氏の「先住民族の地名研究は何をもたらすのか—Thomas Thornton のプロジェクトがアラスカ南東」、小杉世氏の「クリスマス島の英米核実験と除染をめぐる—キリバス民間人の視点から」の2つの発表があった。林氏は、アラスカの先住民族 Tlingit に由来する地名を研究した Thomas Thornton を取り上げ、地名研究の重要性を説いた。また小杉氏は、キリバス共和国のクリスマス島で行われた核実験に関して、現地の人々の証言から核実験およびそれに伴う汚染の影響について、被害者側の視点での考察を行った。午後からは、一谷智子氏を中心に、牧野理英氏、湊圭史氏、そして討論者として芳賀浩一氏を加えたメンバーで『『トランスパシフィック・エコクリティシズム』再考』をテーマにシンポジウムが開かれた。2019年出版の共著を執筆した講師たちが同書を振り返りながら、さらなる展望と新たな可能性について発表された。最後に特別講演として、九州大学の高橋勤氏の「自然保護という思想—ソローからジョン・ミュアへ」と題した講演が行われた。同時代に生きながらも直接出会うことはなかったソローとミュアであったが、ウォールデン湖畔を通じて想いは共鳴する。エコクリティシズム研究の原点回帰ともいえるべき自然保護思想の形成とその系譜を辿るご発表であった。

オンラインでの開催が2年目となり、発表者や会員の方々も今では随分と Zoom の利用に慣れておられた。画面上でのやりとりは幾分寂しさがあるものの、研究活動のスタイルをアップデートしながら、素晴らしいご発表に対して活発な意見交換がなされていたことが印象的であった。海面下に視点を置き、太平洋を横断／縦断し、現地の人々の声に耳を傾け、そして時空をも超えた今大会は、コロナウィルスにも負けない研究者たちの熱意に満ち溢れたものであった。

◆◆◆◆ 2022年度大会情報 ◆◆◆◆

エコクリティシズム研究学会大会

日時：2022年8月21日(日) 9:25～17:00

場所：オンライン開催 (Zoom ミーティング形式)

総合司会 大野美砂

9:25～9:30

9:30～11:00

開会の辞 塩田 弘 会長

ワークショップ

「アジア系作家と病」

(◎岸野英美、深井美智子、真野 剛)

- 11:00~11:10 10分休憩
 11:10~12:20 研究発表(各発表25分、質疑10分)
 研究発表1: 11:10~11:45
 谷岡知美
 「Mostly Sitting Haiku をととして観るギンズバーグの自然観(仮)」
 (司会: 塩田 弘)
- 研究発表2: 11:45~12:20
 塚田幸光
 「シンメトリカル・ラビリンス
 ——ゲイハルター『いのちの食べ方』と「食」生成の政治学(仮)」
 (司会: 横田由理)
- 12:20~13:00 昼食
 13:00~15:00 シンポジウム
 「〈その後〉の世界と文学
 ——ポストパンデミック、ポストディザスター、ポストアポカリプス」
 (◎城戸光世、池末陽子、熊本早苗、中山悟視)
- 15:00~15:10 10分休憩
 15:10~16:20 特別講演
 講師: ロバート・ジェイコブズ先生
 [広島市立大学 広島平和研究所 教授]
 (司会: 松永京子)
- 16:20~17:00 総会
 17:00 閉会の辞 浅井千晶 副会長

◆◆◆◆ 各種委員会からのご報告&お願い ◆◆◆◆

☆(国際)広報委員より☆

会員の出版(単著・共著)・書評・学会などの情報は、ご本人の連絡に基づき研究情報として会員にメーリングリストとHPでお知らせしますので、出版・学会については塩田 弘宛て(shiotah(*)shudo-u.ac.jp)に、書評については大野美砂宛て(misa(*)kaiyodai.ac.jp)にご連絡下さい。

☆ホームページ委員より☆

ホームページ上に掲載する以下の記事を常時受け付けています。三重野佳子宛て(mieno(*)nm.beppu-u.ac.jp)にご連絡ください。

- (1)「旅する会員」ページ: 皆様の旅先や研修先などで撮られた写真を記事と一緒にお願いします。ページに載せる形に整えてワードファイルあるいはPDFファイルでお送りください。
- (2)「エコクリティシズムのテーマの概要」で、現在のテーマの他にご提案がありましたらお寄せください。出版計画委員会で掲載を検討します。

☆事務局より☆

●会費納入のお願い

年会費4,000円(学生会員3,000円、シニア会員2,000円)のご納入を、2022年6月末日までにお願ひします。(年会費を2年間未納の方は、会員資格を失うこととなりますので、ご注意ください。)

4月1日現在で満66才以上の方はシニア会員になることができ、会費は2,000円になります。ご希望の方は、事務局の岸野英美宛て(hkishino(*)bus.kindai.ac.jp)まで生年月日をご連絡下さい。また、ご寄附いただける場合は、その旨振込用紙の通信欄にお書きの上、どうぞよろしくお願ひいたします。ご寄附については差支えのない限り、会計報告にてお名前を報告させていただきます。

●住所、所属、メールアドレスの変更届のお願い

この春、ご住所やメールアドレス・ご所属先等に変更があった方は、レヴューの発送準備等がありますので、早目に岸野英美宛て (hkishino(*)bus.kindai.ac.jp) までご連絡下さい。

.....

編 集 後 記

今年度 No.6 より、発行時期が 4 月 1 日から 5 月 1 日に変更になりました。4 月は異動期でご所属などの変更があるため、このようになりました。ご多忙の折にエッセイをご寄稿頂いた会員の皆さまには心よりお礼申し上げます。南米のコスタリカとブラジルからの便りに視野が開けた気がしますし、発話行為論についての解説は大変勉強になりました。新型コロナウイルス感染症 (COVIS-19) の再拡大やロシアのウクライナ侵攻の凄まじい映像に心が痛む毎日ですが、文学を通して少しでも心豊かに過ごしたいと思っています。(A. M.)

新型コロナウイルス感染症の終息の兆しがまだ見えない中、東ヨーロッパで起こった軍事侵攻は東西冷戦の再来を危惧するものです。人類が科学技術の発展を成し遂げ、どれだけ物質的な豊かさを手に入れたとしても、他を排除し征服しようという思想を持ち続ける限り、平和は脅かされ続けます。我々人類はさまざまな目に見えない境界線を引いてきたわけですが、その執着を捨てきれた時、はじめて世界は変わるのかもしれませんが。さて、今回も 3 名の先生方が素晴らしいエッセイを寄稿してくださいました。国境を越えた言葉の力で、少しでも平和な世の中が来ればと祈るばかりです。(G. M.)

エコクリティシズム・ニュースレター No. 6

会 長	塩田 弘 (広島修道大学)	発行日	2022 年 5 月 1 日
発行元	エコクリティシズム研究学会	編 集	水野敦子 (山陽女子短期大学)
事務局	エコクリティシズム研究学会事務局		真野 剛 (海上保安大学校)
	〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池 12		
	愛知学院大学教養部 菅井大地 研究室		
	dsugai(*)dpc.agu.ac.jp		

(スパム防止のためメールアドレスの (*) は@に変えてください。)